

平成 22年 4月 30日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2009

課題番号：18330186

研究課題名（和文） 中・高生の幼児とのふれ合い体験学習についての実践構造の再検討

研究課題名（英文） Reexamination of junior and senior high school students' experience in early childhood education and care

研究代表者

岡野 雅子 (OKANO MASAKO)

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：10185457

研究成果の概要（和文）： 「幼児とのふれ合い体験学習」について幼稚園・保育所側から見た意義として、保護者の不適切な子どものかかわりが増加していると実感して保育現場としては、近い将来に親になる世代である中・高生が幼児とふれ合う体験の場を提供することにより、幼児理解を促して「将来の親」に対する「子育て支援」となると捉えていることがうかがえた。親になるために必要な適性として「幼児の要求や感情の表出を理解し、応じようとすること（共感的応答性）」が重要であるとの認識のもとに、その発達と影響要因について探った結果、幼児の発達に関する知識を身に付けていることや親になることを肯定的に捉えていることが、共感的応答性を高めることが明らかとなった。さらに、家庭科の「幼児とのふれ合い体験学習」を含む保育学習の前後を比較した結果、共感的応答性は幼児への関心と幼児の発達に関する知識の両方が上昇した場合に大きく上昇することが明らかとなり、男子中学生の得点は低いですが、学習後に幼児への関心および幼児の発達に関する知識が上昇したことから、すべての生徒が学習する家庭科の保育学習の有効性を示唆しているといえるだろう。

研究成果の概要（英文）： The purpose of this study was to examine how the child care workers viewed the Experience in Early Childhood Education and Care at Day Care Center (ECEC). The result showed that the majority of the day care centers regarded it as a good experience, admitted that ECEC had brought about a good effect on the part of both the preschoolers and junior and senior high school students, and considered ECEC as an effective child care support. It was also found that Sympathetic Responsiveness (SR) to children, regarding as an important aptitude for parenting, develops as students' grades get higher. The analyses on the relationships between their SR and the effective factors revealed that the amount of knowledge of child development and the level of acceptance of becoming parents were significantly associated with their SR. In university students, it was shown that ECEC was related to their SR. Furthermore, this study aimed to demonstrate what and how changes occurred in students after participating in ECEC in home economics class. A substantial increase in the SR score was associated with an increase in "interest in children" and "knowledge of child development." Junior high school boys had the

lowest score among the groups, but a significant increase was observed in the “interest in children” score as well as “knowledge of child development,” suggesting child development education provided in home economics education is effective for all students.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
2007年度	5,800,000	1,740,000	7,540,000
2008年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
総計	14,500,000	4,350,000	18,850,000

研究分野：家庭科教育学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：ふれ合い体験学習、中学生・高校生、幼児、幼稚園・保育所、家庭科、かかわり、共感的応答性、発達に関する知識、

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 家庭科は戦後の学校教育において保育教育をになってきた実績を有し、「保育体験学習」が教育現場では積み重ねられてきた。『学習指導要領』（平成10年12月中学版告示、平成11年3月高校版告示）では保育領域の充実が図られ、「保育体験学習」に取り組むよう努めることが明記された。それに伴い、近年「保育体験学習」を実施する中学・高校は急増している。しかし、その実情は、送り出す（中学・高校）側も、受け入れる（幼稚園・保育所）側も様々であり、教育プログラムはバラバラであると言わざるを得ない。

(2) 家庭科は従来より、保育に関する知識・技術を中学・高校と一貫して教える役割を果たしてきたことから、家庭科が基軸となって幼児とのふれ合い体験学習を主導していくべきであると考え。

### 2. 研究の目的

(1) 幼児とのふれ合い体験における今日的課題は何か： 中・高生の幼児とのふれ合い体験学習における送り手（中学・高校）側と受け入れ（幼稚園・保育所）側の実態を把握し、課題を整理して、明確化する。

(2) 幼児とのふれ合い体験学習の教育効果をどのように評価するか： 今日、家庭科のみ

ならず職場体験やボランティア活動等実施形態が多様化しているが、教育効果に違いはあるのだろうか。そのための評価方法を開発する。

(3) 保育施設にとって中・高生のふれ合い体験学習をどのように位置づけたらよいか： 幼稚園・保育所の幼児にとって「ふれ合い体験」の意義とは何であるかについて明確化する。

(4) 幼児とのふれ合い体験学習において、家庭科は他教科や関係機関とどのように連絡・連携を取ったらよいか： 幼児とのふれ合い体験学習の実施にあたっては、他教科や関係機関の理解と協力は不可欠であるため、連携のあり方について検討する。

(5) 上記の(1)～(4)を通して、中・高生の幼児とのふれ合い体験学習の実践構造について解明する。

### 3. 研究の方法

(1) 「幼児とのふれ合い体験学習」の取り組みに関する先行研究等の情報収集を行った。

(2) 「幼児とのふれ合い体験学習」の受け入れ（幼稚園・保育所）側を対象に、受け入れ側にとっての意義について質問紙法および面接法により資料を収集した。

(3) 中学生と幼児の双方に面接調査を実施す

るとともに、中学生の事後の感想文を資料とした。

(4) 発達初期の幼児は言葉によって十分に自らを表現することが難しく、周囲の者が幼児の心に寄り添ってその思いを分かちあおうとする姿勢が大切であり、保育にとってそのような非言語的スキルは極めて本質的な事項である。この点に着目して、中・高・大学生を対象にその発達的变化について質問紙調査を行った。

(5) 家庭科の「幼児とのふれ合い体験学習」を含む保育学習について、中・高生を対象に同一の質問項目による調査を行い学習前と学習後の資料を収集した。

(6) 「幼児とのふれ合い体験」は職場体験学習の位置づけの下でも行われていることから、家庭科と職場体験のそれぞれの実施前後に同一の質問項目による調査を行った。

#### 4. 研究成果

(1) 全国の幼稚園・保育所(251箇所)に対する調査結果から、約9割の幼稚園・保育所が受け入れており、活動内容は「幼児と遊ぶ」が最も多く、幼児にとっても生徒にとっても良い経験となるとする肯定的な意見が多かった。面接調査からは、園側は現在、園児の親への対応に苦慮している様子が語られ、中・高生が園児とふれ合うことで、子どものことを理解しかわいいと思う気持ちが芽生えたら、やがて親になったときに役に立つという意見や、長期的に見た時に子育て支援であるとする園もあった。したがって、中・高生が実際に親になるのはまだ先のことであるが、ふれ合い体験の効果は、長期的スパンのもとで、「プリペアレンティング」としての子育て支援と位置づけられよう。その意味で「幼児とのふれ合い体験」は「循環型効果」をもっているといえるだろう。

(2) 中学生の面接調査からは、教育効果として「幼児の発達を理解する」「幼児とかかわる社会的スキルを身に付ける」「自分の生い立ちを振り返る」「自己効力感が高まる」などの意見があり、感想文からは「今の自分の成長を確認した」「幼児の年齢差を実感した」「小さい子どもは何もできない存在ではないと理解した」などが提出された。一方、幼児との面接資料からは、教育効果として「疑似兄・姉と遊びの経験をする」「いつもよりダイナミックな遊びができる」「いつもとは別の面を発揮する」「発達の次の段階に気がつく」などが認められた。

(3) 親になるための適性に着目した先行研究において共通して用いられている用語として「共感性」が挙げられる。そして、親に

なるために必要な適性という観点から見ると、共感性からさらに発展して、それに応じたケアができること、すなわち「応答性」へとつながる指標が必要であると考えた。そこで、共感的応答性の発達を測るための尺度として、「共感的」に関しては「洞察」「受容」の観点から、「応答性」に関しては「励まし」「援助」の観点から15項目を作成し、予備調査の結果13項目とした。その尺度を用いて、中・高・大学生を対象に幼児への「共感的応答性」の発達およびその影響要因を探った結果、次のことが明らかとなった。①中学生から大学生へと年齢の上昇とともに発達が進み、男子より女子の方が高いが、大学生では差は縮小する傾向が見られ、男子は年齢が高くなってから幼児への共感的応答性が発達することが読み取れた。②幼児の発達に関する知識、自分の親への親和性、親になることの肯定性は、幼児への共感的応答性を高めることが明らかになった。加えて、大学生では、幼児とのふれ合い体験が共感的応答性につながっていることが示唆された。

(4) 「幼児とのふれ合い体験」を通じて、生徒の何がどのように変容するかについて検証するために、中・高生を対象に家庭科の「幼児とのふれ合い体験学習」を含む保育学習の前後に質問紙調査を行った結果、次のことが明らかとなった。①「幼児への関心」は学習後に上昇し、女子は男子より学習前後とも高かった。「幼児の発達に関する知識」は学習後に上昇し、高校生は中学生より高く発達段階差が認められた。②「幼児の共感的応答性」は学習後に上昇し、「幼児への関心」と「幼児の発達に関する知識」の両方が上昇した場合に大きく上昇することから、幼児の要求や感情の表出を理解し応じようとする適性を身に付けるためには両方が重要であることが示唆された。③中学男子は得点が低いが、保育に取り組む入口と言える「幼児への関心」が学習後に上昇し、「幼児の発達に関する知識」も上昇したことは、すべての生徒が学習する家庭科の保育教育の有効性を示していると言えるだろう。

(5) 家庭科と職場体験学習における「幼児とのふれ合い体験」のそれぞれの実施前後に実施した調査資料を比較した結果、幼児の発達に関する知識の得点は家庭科の場合には事後に上昇したが、職場体験の場合には変化が認められなかった。したがって、家庭科の保育学習の一環として取り組む「幼児とのふれ合い体験」は、知識と体験の双方によって一層の教育効果をもたらしていると考えられるだろう。

(6) 「幼児とのふれ合い体験学習」を実施したいと思っている教師は多いが、しかし、実施に際して、どのような準備を行い、どこ

の期間とどのように連携を図ったらよいかなどについての情報がほとんどない実情が明らかとなった。そこで、「中・高生の幼児とのふれ合い体験学習」にあたって、生徒を送り出す側（中学・高校の教師）と受け入れる側（幼稚園・保育所の保育者）の相互理解を深めるために、中学・高校教師および幼稚園教師・保育士の計 7 名の協力を得て、『家庭科の 幼児とのふれ合い体験学習 ガイドブック』を作成した。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 5 件）

- ① 伊藤葉子、倉持清美、岡野雅子、金田利子、中・高・大学生の幼児への共感的応答性の発達とその影響要因、日本家政学会誌、査読有、61 巻、2010、pp.129-136、
- ② 鎌野育代、伊藤葉子、子どものイメージと自己効力感の変容からみる保育体験学習の教育的効果、日本家庭科教育学会誌、査読有、52 巻、2010、pp.283-290、
- ③ 倉持清美、伊藤葉子、岡野雅子、金田利子、保育現場における中・高校生のふれ合い体験活動の実施状況と受け止めかた、日本家政学会誌、査読有、60 巻、2009、pp.817-823、
- ④ 伊藤葉子、鎌野育代、家庭科における幼児とのふれ合い体験での中学生の学び—ケアリング教育という視点からの考察、日本教科教育学会誌、査読有、32 巻、2009、pp.41-50、
- ⑤ 倉持清美、金子京子、阿部睦子、妹尾理子、望月一枝、小学校低学年児とのかかわりを取り入れた“保育”体験学習、日本家庭科教育学会誌、査読有、51 巻、2009、pp. 276~283、

〔学会発表〕（計 7 件）

- ① 岡野雅子、伊藤葉子、倉持清美、金田利子、幼児期におけるふれ合い体験をめぐって、日本保育学会第 62 回大会発表論文集（千葉・千葉大学）、2009、pp. 129、
- ② Masako Okano、Yoko Ito、Kiyomi

Kuramochi、Toshiko Kaneda、Indication of young people's interaction with infants in Japan、Research and Practitioners' Paper Abstracts, XXI. IFHE Congress 2008 (International Federation for Home Economics), Kulturnd Kongresshaus Luzern, Switzerland. 2008、CD、

③ Masako Okano、Yoko Ito、Kiyomi Kuramochi、Toshiko Kaneda、Caring Education in Home Economics in Japan, The 14th Biennial International Congress of ARAHE (Asian Regional Association for Home Economics), Eastin Hotel, Petaling Jay, Malaysia. 2007、CD、

④ Yoko Ito、Masako Okano、Kiyomi Kuramochi、Toshiko Kaneda、Caring Education in Contact Experience between Teens and Children, XXV World Congress of OMEP (Organisation Mondiale pour l'Éducation Préscolaire) Abstracts, Fiesta Americana Reforma Hotel, Mexico City, Mexico. 2007、CD、p. 32、

⑤ 倉持清美、伊藤葉子、岡野雅子、金田利子、幼児とのふれ合い体験に関する幼稚園・保育所側の意識、日本家庭科教育学会第 50 回大会研究発表要旨集（東京・国立オリンピック青少年センター）、2007、pp. 50-51、

⑥ 岡野雅子、伊藤葉子、倉持清美、中・高生のふれ合い体験学習の意義—幼児の側の視点から—、日本保育学会第 60 回大会発表論文集（埼玉・十文字学園女子大学）、2007、pp. 138-139、

⑦ 倉持清美、岡野雅子、伊藤葉子、金田利子、発達をどのように学ぶのか—中学校の家庭科の中で—、日本発達心理学会第 18 回大会発表論文集（埼玉・大宮ソニックシティ）、2007、p. 284、

〔図書〕（計 0 件）

ただし、『家庭科の 幼児とのふれ合い体験  
学習 ガイドブック』(A4 版 24 頁)を作成し、  
日本保育学会年次大会、日本家庭科教育学会  
年次大会等において無料配布した。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岡野 雅子 (OKANO MASAKO)

信州大学・教育学部・教授

研究者番号：10185457

### (2) 研究分担者

伊藤 葉子 (ITO YOKO)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：30282437

倉持 清美 (KURAMOCHI KIYOMI)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：30313282

### (3) 連携研究者

金田 利子 (KANEDA TOSHIKO)

同朋大学・社会福祉学部・特任教授

研究者番号：60086006

長沼 豊 (NAGANUMA YUTAKA)

学習院大学・文学部・教授

研究者番号：10316929

(長沼豊は平成 18 年度のみ)